

(体験版)

昔、イジメっ子だった男子が

メンズマッサージ店で恥ずかしい仕返しをされるお話

著…小松とんねる

絵…MIGCHIP

※※※
目次
※※※

- ① 幼馴染との再会：3
- ② 夢の中の彼女：43
- ③ 店長との卑猥な密会：48
- ④ 幼馴染との休日デート：84
- ⑤ 研修前のシャワールーム：92
- ⑥ アブナイ研修：113
- ⑦ いじめっ子がいじめられるまで：160

① 幼馴染との再会

(中略)

*

ほんと、久しぶりだね。元気してた？

ああ。イトーは？

元気だよ。頑張ってダイエットもしたよ。

そうみたいだな。

彼女とか、もうできた？

うるせえ。

会話の間、ぬるめのボディオイルを腕や脚に塗られ、肌が摩擦によって火照って

ゆく。同年代の女の子にこれほど身体を触られるのは正樹にとって初めての経験だ。それだけで胸の鼓動が激しくなる。

——イトーが、俺の身体、さわってるんだよな。

瞼の裏でその様子を思い浮かべてしまう自分がいる。それに、女の子は皆こんな感じなんだろうか。彼女の手のひらや指の感触がひどく心地好い。彼女はそれのたわわに実った乳房と、脚の付け根には大切な女性の部分を抱えて今自分の身体をケアしてくれているのだ。その事実が正樹の欲望を駆り立てる。

——まずい。

股間の血の巡りが良くなりすぎてしまいそうだ。こんなところで、しかも同級生の目の前で勃起するわけにはいかない。かといって手で抑えれば逆に一発で欲情しているのがバレてしまう。彼は腕は横にしたまま、歯を食いしばって耐えていた。アスパラガスはタオルの下でひくひくと蠢いていた。

「ちよつと足、開いてね」

そう言って、彼女は正樹の両足の間に自分の座るスペースを作り、寝台の上に乗ってみせた。

「ちよ」

「はい、太ももをやってくよ？」

タオルは上に乗せただけだから、あんまり彼女が身を屈めてしまうと彼のアスパラガスの先つちよが見えてしまうのではないか。そんな不安がよぎる。羞恥心がどんどん大きくなってゆく。

「ふふ、なんだか、正樹君の大事なところ、見えちゃいそうだね」

「や、やめろって。いつもこんな感じでマッサージしてるのか？」

「ううん、と伊東由加はあつさりと言を振る。

「さすがにここまで大胆にはできないよ。正樹君だから、とくべつね」

「な」

手がふくらはぎを揉み込んで来た。

「あ」

「ふふ、正樹君の大事なところ、見ちゃおっかな」

「い、イトー？」

少し雰囲気がおかしなことに彼は気づいた。気づくのが遅すぎた。

「昔さ、あたしのお腹つまんだり、悪口言ったりでずいぶん正樹君は苛めてくれたよね」

彼女は両手をそれぞれ正樹のふくらはぎを若干つねるようにして動かし、身を屈めてタオルの下を覗き込むそぶりを見せてきた。

「そ、それは若気の至りっていうか、その」

「傷ついたなあ。そういえばふざけておっぱい触られちゃったこともあったなあ。仕返しに今度はあたしが正樹君のこと、恥ずかしい目にあわせちゃおっかな」

いつの間にか両手首をがっちり彼女に握られていた。足をばたつかせたら伊東に当たってしまう恐れがあった。動けなかった。

———そうか。

彼女は昔、苛められていた復讐を今この場で成し遂げようとしているのだ。彼女のお腹をクラスメイトたちがいる前でつまんでぷにぷにさせて辱めた自分を、今度は辱めようとしているのだ。

手がじりじりと正樹の下腹部へと近づいてくる。もしも今、彼女にアスパラガスを見られたら、それは恐ろしい想像だ。包茎であることもバレてしまう。

「ご、ごめん。俺が悪かった。だから」

「だから？」

「み、見ないでくれ、頼む」

「ふふ、恥ずかしい？」

「は、恥ずかしい」

「じゃあ言って。「あの頃いじめてごめんなさい。僕の恥ずかしいところ、見ないで

ください、素敵な伊東様って」

「なんだよ、それ」

「はやく」

ますます身をかめようとする彼女に、正樹は慌てて「わかった、言うから！」と叫んだ。

「ふふ」

——ち、ちくしょう。

屈辱だった、はずだった。

が、それよりも自分の秘部を異性に見られてしまうかもしれないという、異常な状況への興奮のほうが勝っていた。不思議と腹も立たなかった。

「あ、あの頃いじめてごめんなさい。俺の、見ないでください」

「だめ、「僕の恥ずかしいところ」でしょ。ちゃんと正確にぜんぶ言わないと——ちくしょう。」

「あの頃いじめてごめんなさい。僕の恥ずかしいところ、見ないでください。イトー様」

「「素敵な」が抜けてたね」

残念でした、と彼女が一声かけた。

「え、ちよ、だ、ダメだ。やめ」

彼女は。

正樹のタオルの下を覗いて笑った。

「うーわー、かわいい。なにこれー」

——み、みられた。見られちゃった。同級生の女の子に。

「うう、うう」

「見ちゃった、正樹君のかわいいおちんちん、見ちゃったよー」

「や、やめてくれ」

消え入りそうな声を出すのがやっとだった。なんて情けない姿を自分はさらしているのだろうか。

「ねー、経験あるって嘘でしょ。こんなちっちゃいおちんちん、女の子の前に出せないもんね。ふふ、皮かぶっちゃって」

「ああああああ」

伊東はずっと正樹の足の間で興奮したように声をかけてくる。そして。

「あれ、なんだかひくひく動いてるよ？」

「ああ、イトー、だめだ。ほんと、ああ、みちや、見ちゃだめだ」

彼の悲鳴じみた叫びにも容赦なく覗き込む姿勢を崩さない彼女の前で、正樹のア
スパラガスはどんどんとその硬度と体積を増していった。

「うわー、すごいすごい」

「ああ、だめ、見るな、見ないで」

ぐん、ぐん、ぐん。

ぴく、ぴく。

あああああ。

とうとう彼にかかっていたタオルには小さなテントが張られてしまった。隠して
いるだけになんともそれは滑稽で、恥ずかしさが倍増だった。

「なに、女の子に見られたからっておつきくしてるの？　へんたいだなあ」

「ち、違うんだ、これは」

「違うくないでしょ。ほら、今もちんちんがぴくぴくってかわいく震えてるよ？」

「うう」

「女の子に勃起していくところ、ぜんぶ見られちゃったね？　包茎で恥ずかしいち
んちん、一番見せたくないような情けないところ、ぜんぶ見られた気分はどう？」

「や、やめろ」

反抗の声もはや消え入りそう。

「うわー、勃起しても正樹君の、ぜんぶ剥けないんだね。小学生みたい。ねえ、正樹君はまだ小学生のままなの？　ねえねえ」

涙が出そうになる。それでも彼女からふんわり漂ってくる女性の匂いと、情けない姿を見られている事実に興奮してしまつて、アスパラガスが元気良く跳ねた。

「あはは、正樹君はおちんちんのほうが素直だね。今、ぴくぴくつて、「そうです」つて言ったよ？」

「い、イトー。もう許して」

「じゃあもう一度、今度は「お子様ちんちん、勃起させてごめんなさい。女の子に見られて興奮しちゃう変態でごめんなさい」つて謝ってくれたら許してあげるよ」

「そ、そんな、言えるはずが」

「あー、先つちよから透明なのがなんか出てきた。ねえ、なにこれ」

もはや完全に遊ばれていた。

「なんだろねー、正樹君のちっちゃくて可愛いおちんちん、どうしちゃったんでしゅかねー」

赤ちゃん言葉まで使われ、完全にバカにされている。だが正樹ももう理性が吹き

飛んでしまいそうなほどに欲情してしまっていた。

――ああ、イトーに見られてるってだけで興奮しちゃう。うう、だ、出したい。精子出したいよ。

「お、お子様ちんちんを勃起させて、ご、ごめんなさい」

「いやーん、へんたいーい」

――あああ。

ぴく、ぴく、と袋まで震え、先走りの透明な液はますます溢れた。その一筋のひと雫が肉幹を伝い、玉の裏を流れた。

室内は相変わらずエレクトロニカの、ピアノベースの知らない音楽が流れていた。窓から見えるすぐ下の路地には、スマートフォンを耳に当てて誰もいないのに頭をぺこぺこと下げているサラリーマン風の男がいたが、部屋にいる二人には何の関係もなかった。世界に二人だけしか存在しないのではないか、そんな気さえした。

*

「うう、イトー、イトー」

ぴく、ぴく。

正樹のアスパラガスは今や、ピンと天井方向を向いてそそり立っていた。脈動を繰り返すそれは、いてもたってもいられない、と言わんばかりにタオルを被せられながらもがいているように見受けられた。彼自身は視界が布地で遮られているせいか、余計に自分の無様な格好を頭の中で想像してしまっていた。

「ねえねえ、正樹君のね、タマタマの裏のスジまでここからだとよく見えるよ？ お毛々も少ししか生えてないんだね、ほんとにお子様って感じ」

「あああ」

ここまできると彼の理性はとうに崩壊していた。射精したいという欲望、白い液体を思い切り飛ばしたいという欲に頭の中が支配されつつあった。

——でも、ここを出したら射精するところまでイトーに見られることになる。

今やすっかり成長した同級生にその一部始終を見られることは、今の姿でさえ相当恥ずかしかったがそれ以上に、とてもとても情けなくて恥ずかしいことなのは確かだ。

「うう」

びくん。

「あれ、また激しく跳ねた。なに、何を想像してるの、正樹君」
——し、しまった。

まさか射精を見られる場面を想像してたら動いちゃいました、などと言うわけにはいかない。彼女は相変わらず正樹の腕をがっちりと押さえている。体勢が不利なこともあり、華奢な正樹の腕力では振りほどけそうにない。

「ねえねえ、何を想像してたらおちんちん動いちゃったのかな」と、訊いてくる彼女に、正樹はぷいと首を横に向けることで拒否の意思を示した。

「あー、そうなんだ。そういう態度とっちゃうんだ」

何を言われようと正直に告白するわけにはいかない。かといって嘘をついてもなんだかすぐにばれてしまうような気がして、彼にできる抵抗は何も言わないという選択だけだった。

「そうやって黙っちゃう悪い子には」

盛り上がったタオルを前にして彼女はにこっと笑ってみせた。が、目隠しをされている正樹からはその様子はもちろん見えない。

——なんだ？

「こうだ」

「あ」

それまで被されていたタオルが一瞬のうちに取り払われた。

弾みで彼の目隠し用タオルもずれて床にスルリと落ちる。目の前には彼の足の間に座り込んで無邪気に笑う伊東由加と、彼女のすぐそばで小さいながらもぴくんぴくんと勃起するペニスが、室内の明るい照明の下にさらけ出されていた。

「ああああああ」

「あはは」

——こ、こんな明るい場所で同級生の女の子に見られるなんて！

正樹は上半身をのけぞらせ、なんとかその身を照明の下から隠そうとしたが、何しろ寝台の上には彼の他にイトーもいる。そのせいで開いた足を閉じることもできない。

「やん、正樹君の、ちっちゃいくせによく動くんだね。わざとやってるのかな」

「そ、そんなわけないだろ」

仰向けになった身体を反転させようとも試みる。じたばたと動いたせいで彼の膝が曲がり、ちよどMの字で開脚した格好で彼女に股間をさらけ出すことになる。

「はあ、はあ、ああ、イトー、ごめん。見ないで、くれ」

「すごいね、女の子に見られるだけでそんなに興奮しちゃうんだ」
あれだね、正樹君ってドMだったんだね。

「ど、えむ？」

「そうでしょ？ 同級生に自分の情けなくて恥ずかしいとこ見られて勃起して、そのうえエッチなお汁まで垂らしちゃって」

「い、いちいち現状報告するな」

「ふふ、ごめんごめん」

二人の会話の間にも勃起は脈動を繰り返し、透明の液はどんどん尿道の穴から溢れ出してくる。膝を立たせたことで、二つの玉袋は重みで揺れる。彼女はもはや頭を屈める必要もなくなったのか、今度は寝台のうえにあぐらをかいた。その姿がはしたなく見えるわけでもなく、妙な艶かしさを出していることに正樹は気づいた。

「――い、イトー。」

「そのまま動いちやダメだよ？」

「う、う」

彼女の言葉に逆らう気力が起きない。自分が自分でなくなるような、ぼーっとした面持ちでいる正樹を押さえつけていた腕を彼女は外した。

「すごい。あたし、ここをこんなにじっくり見たの、初めて」

そう言って白魚のような彼女の人差し指が触れたのは、玉の裏側だ。

「あああつ」

びくん、びくん。

ひくひく。

——お、女の子に触られた！

優しい動作だった。もちろん初めての経験だ。

正樹の腰は震え、アスパラガスがますます揺れた。

「触られただけでそんな感じちゃうんだ」

「うう、か、感じてなんか、いない」

「今さらそんな嘘ついててもだめだよ。下のお子様は素直にうなずいてくれるんだから」

「あ、ああ」

さっきの赤ちゃん言葉もそうだが、彼女が彼のことを子ども扱いするたびに正樹の下半身は温(ぬる)めの温泉に浸かった瞬間のような、なんとも言えない心地よさを感じることを否定できなかつた。

——気持ちいい。ああ、なんだよ、これ。

さっき彼女が口にした「ドM」という言葉が脳裏に焼き付いていた。そんなはずがない、もちろん性的な事柄に興味はあったけど、至って健全なものだったはずだと思っていた。思い込んでいた。けど、まさかこんな形で自分の性癖について気づ

かされるなんて。

「イトー」

「んー？」

「お、俺」

「だーめ、こんなかわいいおちんちんしてる正樹君は「僕」のほうが似合うよ？」

「うう」

びくん、びくん。

細い幹にはわずかに血管が浮き出ている。

「ぼく、僕」

「うん、なに？」

——だめだ、言っちゃだめだ。それを言ったら、もうおしまいだ。

我慢できなかつた。生まれたままの姿を同級生の女の子にさらけ出し、さらにペニスに最大限の勃起をキープして、彼女に見せつけるかのようなM字開脚の体勢で、彼は彼女に言った。

「い、イキたい」

「え」

「イキたい、射精したいんだ。イかせてくれ、イトー」

昔、いじめっ子だった男子がメンズマッサージで恥ずかしい仕返しをされる

お願いだよ。

そういう彼の腰は前後にゆっくり動き始めていた。

*

「正樹君のヘンタイ」

ぴん、と彼女は肉幹を指ではじいた。

「あうう」

「さつきも言ったでしょ、ここはエッチなお店じゃないんだよ？　なのに正樹君はこんなにおチンチン勃たせて、挙句の果てに「イきたい」だなんて。どんだけヘンタイなの」

「は、裸に剥いたのはそっちじゃないか」

「興奮したのは正樹君でしょ」

それを言われるとつらい。

びくん、びくん。

その間にもアスパラガスは自己主張に余念がない。彼女の目線は彼の表情と下腹部を行ったり来たりする。

——ああ、イトーが俺の見てる。俺の恥ずかしい勃起、ぜんぶ見てるよ。

「こし」

「え」

「正樹君、腰動いてるよ？」

「あ、あ、いや、その、これは」

違うんだ、と否定しながらも天井に向かって股間を突き出してしまふのを制御できない。

「そっか。えっちしたことないから、そうやっていつつも女の子の膣中に挿れるとこ、妄想してたんだあ」

「いとー、違うんだよ。これは」

「違くないでしょ？」

伊東由加の瞳が真っ直ぐ正樹を捉える。ふと、彼は「イトーは俺のこと、怒ってるわけじゃないのかもしれない」と思った。その眼から怒りの色は感じられなかった、ような気がしたからだ。ボブカットの短い前髪が揺れていた。

「ち、違くないです」

昔、いじめっ子だった男子がメンズマッサージで恥ずかしい仕返しをされる

「もう、正樹君ってどMのヘンタイ君だったんだねー」

「う、うう」

「イきたい？」

「せーし、出したい？」

彼女が仕方なさそうに訊いてきた。

「出したい、出したいよ」

「そんなに出したいんだ」

ため息を吐きながら、彼女は寝台から降りた。正樹は誰もいない宙に向かって腰をへこへここと突き出しながら、彼女が自分の横に立つのを見ていた。硬くなったアスパラガスが喘いでいた。

彼女は彼の耳元に囁いた。

「正樹君はお子様ちゃん」

「あああ。」

えっちな言葉を訊いて、正樹の腰が跳ねた。すぐそばで呟いてくれるせいで、彼女の吐息が近くなった。それすらも彼の欲情に拍車をかける。

「ふふ、女の子がえっちなこと言うたびに興奮しちゃうんだね。ほんっとえっちなあ、あ。」

びくん、びくん。

へこ、へこ。

「ねえ、正樹君。イきたいの？」

「い、イきたい。イきたいよ」

「男の子がイクってどういうこと？　ちやんと言わないとわかんないよ」

――嘘だ、知ってるくせに。

だが今の正樹は自分で恥ずかしい言葉を披露することが腰の快感につながることを知ってしまった。あの、伊東の前で。それも興奮の材料のひとつになっていた。

「えと、射精することです、精子を、だ、出すことです」

不思議と敬語になってしまいう自分がいる。上下関係はすっかり出来上がっていた。彼女が耳元で囁く。

「もつとえつちに言ってみて？　そしたら、ご褒美あげるかもよ」
ご褒美。

なんて甘美な言葉なのだろう、なんて卑猥な響きがするのかわからない。それも、あのイトトに言われているのだ。

――俺、もしかしたら、イトトのこと、好きだったのかな。

もしそうだとしたら、それに気づくまで自分はいったい何年かかったのだろうか。なんて間抜けな。

その彼女は今、白衣のような制服に身を包んで、下は短めのスカートを履いて、柔らかそうな太ももと純白のニーハイソックスに身を包んで、彼と二人きりの個室にいるのだ。

——イトー。

心の中で彼女のことを連呼する自分がいた。

「ほら、もっとえっちに」

「イトー、俺」

「ぼく、でしょ」

「ぼく、僕のお子様ちんちんから白いえっちな液、ドピュドピュって飛ばしたいです。お願いします」

出させてください、と最後に付け加えた。

「やん、女の子にそんなお願いするなんて、えっち」

「うう、言わせたくせに」

「ふふ、そっか。正樹君はあたしの前で、白くてえっちな液を飛ばしたいんだ？」

「は、はい」

しよーがないなー、と彼女は言った。

「特別だよー」

妖しげな笑みを浮かべながら、彼女の顔が彼の股間に近づいてゆく。

——あああ。

正樹はその期待から、足を大きく広げた。

アスパラガスは嬉しそうに一際大きく跳ねていた。

*

「ほら、いいよ」

「え」

彼女は正樹の下腹部を今度は上から覗き込むような姿勢で、何かを促した。

「出したいんでしょ。特別にここで出すの許してあげるから、自分で処理しなよ？」

「そんな」

正樹からすれば、彼女が手や、もしかしたらその濡れた唇を使ってくれるのでは

と期待していたのだ。

「なにポカンとした顔して。ここは風俗じゃないんだから、ほんとに硬くさせるの
だってダメなんだよ？ でもこれじゃもう収まりつきそうにないし。正樹君は昔か
ら知ってるから、特別に自分で出すの許したげるよ」

「ち、ちくしょう」

イトー、お前、そんなに俺に意地悪したいのか。

「なにがー？」

「このやろ、わかってるくせに」

「ふふ」

ねえ正樹君。

なんだよ。

「そんな格好で威張っても、お間抜けなだけだよ？」

「あう」

そういえば自分は丸裸だったのだ。

ひくひくとペニスを勃起させながら「ちくしょう」とか言っていたって、空元気にも
ほどがある。

「ほら」

また耳元に彼女の唇が近づいていた。

「特別に見ててあげるから、自分でやってみせて？ 見られるの、好きなんでしょ」
「うう」

「ふふ、もう否定もしなくなっちゃったね。素直になるのは良いことだよ？ えらいえらい」

赤ん坊にやるそれのように頭を撫で撫でされる。屈辱だけど、それ以上に心地よかった。

「い、イトー」

「ねえ、じゃあさ。あたしの名前を言いながら、シていいよ。ユカって言いながら、さ」

「そんな恥ずかしいこと」

「もうじゆうぶん恥ずかしいから、だいじよぶだよ」

ほら、言ってみせて。あたしの下の名前。

「ゆ、ユカ」

「そう」

「ユカ、ユカ」

「なに、正樹君、どうしたの？」

「見て、僕のオナニー、見ててください」

「ふふ、いいよ。正樹君の恥ずかしいオナニー、あたしがずっと見てあげてるね？」
彼はゆっくりと左手を、アスパラガスに近づけていった。

「へー、左でするんだ」と外野の声。

左手の人差し指と親指で自分のそれをつまんでみせる。そのまま皮を上下にめくったり戻したりする。

「ああ、ユカ、ユカ」

しゅ、しゅ、くちゅ、しゅ。

ときどき、カウパー氏線液の混じる音が聴こえる。

「うわー、すごくやらしい」

「ユカ、ごめん、ああ。見ちゃダメだ、見ちゃダメだよ」

「嘘つき、見てもらいたいくせに」

くちゅ、くちゅ。

しゅ、しゅ、しゅ、しゅ。



「男の子のオナニーってこういう風にするんだ」

「ゆ、ユカは初めて見るのか？」

「当たり前じゃない。勘違いしないでしょ、あたしは普段はこういうこととかしな
いんだからね」

「男にえっちな言葉をかけることのことか？」

「ばか」

そうやって罵ってくる彼女がなんだかやけに可愛く見えた。正樹の手つきが速度
を増した。

「やん、すごく激しい」

「ユカ、ユカ」

しゅ、しゅ、くちゅ、くちゅ。

彼女の目はずっと正樹のペニスを捉えている。そのことが彼の興奮を加速させて、
皮をスライドさせるたびに見える亀頭はぬらぬらと妖しげな光をまとう。

「男の子もこんなに濡れるんだね」

「うう、いつもこんなに濡れるならねえよ」

「ふーん、じゃあ今日は特別なんだ」

しまった、墓穴を掘った。

「女の子に見られていつもより興奮してるんだね」

「うう、だって、ユカ」

「ほんと、ヘンタイ」

——ああああ。

罵倒の言葉すら心地よい。

くちゅくちゅ、しゅこしゅこ、しゅ、しゅ。

「ああ、ユカ、俺、もうダメだ。出るよ」

「え、もう出るの？ 早くない？」

「だって」

何もかもが初体験なのだ。童貞の男子にとって、この状況は酷だった。

彼女は自分の肩を彼の肩に寄せてきた。

いい匂いがした。

「仕方ないなあ、さっき許すって言っちゃったし」

「いいのか、出すよ」

「うん、いいよ。正樹君の、えっちなミルク出すとこ見せて」

「はあ、はあ。ユカ、出すよ」

ラストスパートだった。

左手が皮をますます動かして、玉袋はきゅんつと閉じた。

「ユカ、ああああ、ユカ」

「イって。正樹君、あたしの目の前でどぴゅどぴゅ出して！」

——んっ。

それは天井近くまで跳ね上がった。

初撃が正樹の太ももに落ちる頃、二撃目が打ち上げられ、二人の前で噴水となつて白濁液が飛び散った。

どぴゅ、どぴゅ、どぴゅ。

ペニスが脈動するたびに打ち上げられた白い液を二人でぼんやりと眺めていた。

長い長い射精だった。

「やん、すごい、まだ出てるよ」

びゅ、びゅ、びゅ。

収束するにつれ、腰の震えも小さくなっていき、肩を寄せ合った二人の前でやがて最後の一撃が放たれ、それは正樹の腹筋の上に落ちた。

「はあ、はあ、はあ」

「す、すごい」

人生で最大の射精を終えたばかりの正樹は急激な眠気に襲われ、どんどん縮んで

いくペニスを隠すこともせずそのままユカの肩に寄りかかっていた。

「ごめん。いろいろ汚しちゃった」

勢いよく射出された白いそれは寝台の、主に彼の身体にはあるが、あちこちに飛び、床にもその痕跡があった。精子の独特な臭いが漂っていた。

「すごいよ、正樹君」

彼女の頬は赤みを増していた。

「い、いつもこんなに出るの？」

首を振る。ユカの甘い匂いがした。

「こんなに出したの、初めてだよ」

「ふふ、そーなんだ」

そーなんだ。

もう一度、彼女は呟いた。

「ねえ」

「なんだよ」

「気持ちよかった？」

ひどい眠気だった。瞼をゆっくりと閉じながら、彼はこくと頷いた。

「最高だった、ありがとう」

「ふふ、どーいたしまして」

頬に何かに触れた気がした。

それが彼女の唇だと気づくまでには、まだもう少しの時間が必要だった。

*

「またおいでよ」

「えー」

帰り際、シャワーを済ませて服を着替えた正樹にユカが言った。

「嫌だよ、また恥ずかしい目に合わせられるんだろ？」

「あーそんなこという。喜んでたくせに」

「う」

服を着ると、さつきまでの痴態が余計に恥ずかしくなってくる。耳の裏まで赤くなってしまう。

「いいじゃん、また来てくれたらさ」

ユカが「もつと良いことさせたげるよ？」と言った。

「ほ、ほんとか」

「ちよつと、そんなに目を血走らせないでよ、怖いよ」

「あ、ああ。ごめん」

ユカは部屋を出て受付口まで見送ってくれた。入ってきたときにそこに居た受付の女性はどこにもいなかった。二人だけだ。

「ユカ」

「なに」

名前を呼ぶことに抵抗がなくなっていたのは、二人の距離が近づいた証拠なのかもしれない。

「さつき、何でキスしたんだ？」

「さあ？」と彼女はとぼけたような表情を浮かべた。

「――ま、いいか。」

正樹はエレベーターに乗り込んで、見送る彼女に手を振りながら「また来ようかな」と思い始めていた。

「ねえ、正樹君」

「なんだよ」

昔、いじめっ子だった男子がメンズマッサージで恥ずかしい仕返しをされる

「あたしね」

「なんだよ」

「昔、苛められてたかもしれないけど、そんなに嫌いじゃなかったよ？」

「え」

扉が閉められた。

ひとりになった正樹の思考が動く前に、エレベーターは動き出し、彼の何もかもを階下へと運んでいった。

つづく

この続きは製品版をお買い求めのうえ、

お楽しみください。

この作品における、著作権は著者にあります。
無断での使用は固く禁じます。

午後のお姉さん 編集部より